

日英多義語の認知意味論的分析  
:—「ミミ（耳）」と“ear”—

メタデータ	言語: ja 出版者: 福井大学教育・人文社会系部門 公開日: 2024-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/0002000202">http://hdl.handle.net/10098/0002000202</a>

# 日英多義語の認知意味論的分析

## －「ミミ（耳）」と“ear”－

皆 島 博<sup>\*1</sup>

(2023年9月26日 受付)

内容要約 本論は、認知意味論の理論に基づき、日本語の身体部位語「ミミ（耳）」とそれに対応する英語の“ear”の多義構造を分析する。また、日英対照言語学の観点から、日本語「ミミ」と英語“ear”の意味における類似点および相違点についても考察する。

キーワード：身体部位語彙・多義語・意味拡張・放射状カテゴリー・対照言語学・認知意味論

### 1. はじめに

本論は、日本語と英語の身体部位語彙「ミミ（耳）」と“ear”を取り上げ、その多義構造および意味拡張のプロセスとその動機付けについて、認知意味論の観点から分析を行う。日本語の「ミミ」と英語の“ear”は、それぞれ、次のような、少なくとも3つの異なった語義（多義語の個々の意味）で用いられる点で多義的であるといえる。

- (1) a. 福ミミ（耳たぶ）  
b. ミミが遠い（聴力）  
c. パンのミミ（端の部分）
- (2) a. external ears（耳たぶ）  
b. sharp ears（聴力）  
c. the ear of a pitcher（取っ手）

---

<sup>\*1</sup>福井大学教育・人文社会系部門総合グローバル領域

認知意味論では、上のような日本語の「ミミ」と英語の“ear”が提示するさまざまな語義は無秩序に派生してきたものではなく、プロトタイプの意味（基本義）を起点として、そこからなんらかの認知的動機付け、すなわち、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）によって意味拡張を展開し、相互に関連のある意味と意味とのネットワーク、すなわち、放射状カテゴリーを構成するようになったと考える。本論の目的は、「ミミ」と“ear”に関して、次の4点の課題について、認知意味論及び日英対照言語学の立場から記述と分析を行い、それらを明らかにすることである。

- ① 「ミミ」と“ear”の複数の意味（語義）の区別
- ② 「ミミ」と“ear”のプロトタイプの意味（基本義）の仮定
- ③ 「ミミ」と“ear”の意味拡張の動機付け（メタファー・メトニミー・シネクドキ）の認定
- ④ 「ミミ」と“ear”の多義構造にみられる意味論的類似点と相違点の指摘

## 2. カテゴリーとしての多義語

ある語が相互に関連した複数の意味を持っていることを多義性といい、また、そういう語を多義語という。例えば、英語の“eye”という語には、次のような意味がある（『ライトハウス英和辞典』の記述を一部修正・省略して引用）：

- ① 目，眼
- ② 視力，視覚，視線
- ③ 観察力，見分ける力，鑑賞力，眼力
- ④ 目つき，目もと
- ⑤ 目の形をしたもの；台風の目

認知意味論では、多義語を一種のカテゴリー、すなわち、複数の語義の集合と考える（榎山・深田 2003：141）。カテゴリーとは、現実世界に存在するさまざまなモノをグループ分け（分類）して、ひとまとめにして捉える心の働き（認知）をいう。多義語は、相互に関連した複数の意味をひとまとめにして、その構成員としての語の個々の意味から構成される、という点でカテゴリーを構成しているといえる<sup>1)</sup>。

認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーのすべての構成員が構成員であるための必要十分条件を満たしている必要はない。むしろ、構成員の間に中心的なものと周辺的なものとの区別が存在するだけであると考えられる。また、他のカテゴリーとの間の境界線も曖昧なものであると考えられる。これらの点が、カテゴリーのすべての構成員は、プラス（+）かマイナス（-）かの二項対

立に基づいて決定される必要十分条件を満たしている必要があり、また、他のカテゴリーとの間の境界線も明確なものと考えていたアリストテレスの時代の古典的カテゴリー観と異なっている。認知意味論のカテゴリー観では、カテゴリーには次のような特徴があることが提案されている（Wittgenstein 1978；Labov 1973；Rosch 1975；Lakoff 1987）：

- ① カテゴリーの構成員は家族的類似を示す
- ② カテゴリーの構成員には典型的事例が存在する
- ③ カテゴリーの構成員はプロトタイプ効果を示す

まず、「家族的類似」とは、カテゴリーの全構成員は共通の性質を持っているわけではないが、各構成員が部分的にどこかで共通の性質を持つことによって、カテゴリー全体の統一性が保たれていることをいう。次に、「典型的事例」とは、カテゴリーの構成員の中には、最もわかりやすい例、つまり、代表的な構成員であるプロトタイプが存在することをいう。最後に、「プロトタイプ効果」とは、カテゴリーの構成員は均質なものではなく、典型的なものとはそうでないものに分かれ、構成員間でカテゴリーへの帰属度に程度差が存在していることをいう。

上で引用したカテゴリーとしての多義語“eye”に当てはめてみると、①～⑤の各語義がカテゴリーの構成員ということになる。そして、カテゴリーを構成するということは、カテゴリーの3つの特徴を示すということになる。したがって、カテゴリーの構成員（各語義）の間には、典型的な意味（プロトタイプ）とそうでない意味（非・典型的な意味）との違いが存在し（プロトタイプ効果）、全く同一の意味はないが、部分的に類似した意味が混在することによって、カテゴリー全体としての統一を保っている（家族的類似）と考えられる。

ところで、一つの語が多義性を獲得することを認知意味論では意味拡張といい、それはカテゴリー拡張の結果生じたものとする（Lakoff 1987；Sweetser 1990；Taylor 1995）。認知意味論では、多義語というカテゴリーは、古典的カテゴリー観の要件を満たすものではないので、そこには中心的構成員（プロトタイプの意味）とそれ以外の周辺の構成員とが混在する。なお、プロトタイプの意味（基本義）とは、複数の意味の中で最も基本的な意味のことで、意味拡張の起点となる意味であるが、主として、次のような特徴と傾向性をもつ（Dirven and Verspoor 1998；杉山 2002；瀬戸 2007a；高橋 2010；瀬戸他 2017）：

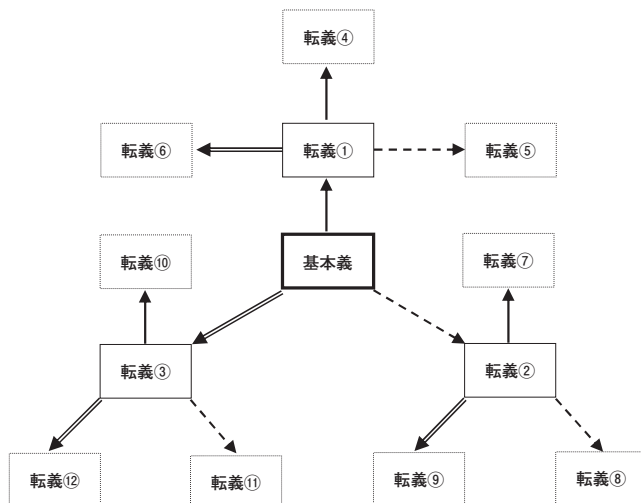
- ① 文脈なしで最も想起されやすく、身体性・具体性が高い、文字通りの意味。
- ② 言語習得の早い段階で獲得される意味。
- ③ 他の転義を理解する前提となる、あるいは、他の転義との関連性が自然に説明できる意味。
- ④ 使用頻度が高いことが多い意味。
- ⑤ 慣用表現や比喻で使用されやすい、すなわち、用法上の制約を受けにくい意味。

カテゴリー拡張では、この基本義を起点として「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」と呼ばれる3種類の比喩（認知的動機付け）が要因となり、複数の方向へ語義の意味拡張が展開する。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997）、初山・深田（2003）、瀬戸（2007a, b）、瀬戸他（2017）にしたがい、次のように定義する。

- ①メタファー：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ②メトニミー：二つの事物の間に存在する何らかの隣接性・近接性・関連性・連想に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- ③シネクドキ：一般的な意味（類概念）を持つ形式を用いて特殊な意味（種概念）を表す、逆に、特殊な意味（種概念）を持つ形式を用いて一般的な意味（類概念）を表す。

カテゴリー拡張の最も一般的な形態を放射状カテゴリーと呼ぶ。これは、Lakoff (1987) で提示されたモデルで、中心的構成員（プロトタイプ）を2次的構成員（非プロトタイプ）が取り囲み、その2次的構成員を中心に、それを3次的な周辺的な構成員が取り囲む、というように、文字通り、結果として、中心から外へ向かって放射状に拡張していくカテゴリーのことである（辻 2002: 238；辻 2013: 340）。多義語の放射状カテゴリーのモデル（多義ネットワークモデル）を図示すると下のようになる（辻 2002：238；瀬戸 2007a：5；瀬戸 2007b：41；瀬戸 2019：311；瀬戸他 2017；辻 2013: 340）を参考に作成）。なお、実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに、二重線矢印はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す：

図1 多義語の放射状カテゴリーのモデル



上の図で、中心に位置する「基本義」が中心的構成員（プロトタイプ）で、そこから、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、「転義①」、「転義②」、「転義③」の第2次構成員へとカテゴリー拡張をしている。さらに、「転義①」から、それぞれ、メタファー、メトニミー、シネクドキによって、「転義④」、「転義⑤」、「転義⑥」の第3次構成員へとカテゴリー拡張をしている。「転義②」と「転義③」からのカテゴリー拡張についても同様である。ただし、この放射状カテゴリーの図は多義語の意味拡張の理論上のプロセスを図示したモデルにすぎない。したがって、すべての多義語がこのような意味拡張のプロセスをたどるということではないことに注意する必要がある。

### 3. 日本語「ミミ」の多義構造

#### 3.1 「ミミ」の複数の意味

ここでは、「ミミ」の複数の意味（語義）の区別を行う。語義の区別に際して、指針とするのは国語辞典における意味の分類と語義の定義である。本論では、『広辞苑』（語義数10）、『大辞林』（語義数8）、及び『大辞泉』（語義数8）の国語辞典を参照する。これらの国語辞典における「ミミ」の語義数は大きく違わない。しかし、項目がやや細分化されている傾向がある。そこで、意味領域・分野が共通している、あるいは近い定義をまとめて再整理すること次のような3系統に分かれる。なお、各定義の冒頭の番号は各辞典における定義の通し番号である。

	広辞苑	大辞林	大辞泉
I	①聴覚をつかさどる器官。人では外耳・中耳・内耳の3部に分れ、外耳は耳殻と外耳道とから成り、外耳道の内端には、空気の振動を伝える鼓膜がある。鼓膜の振動は、中耳にある3個の骨によって伝えられ内耳に達し、聴神経を刺激して聴覚を生ずる。また、内耳には一般に平衡器官が含まれている。 ②耳殻のこと。耳朶。	①脊椎動物の頭部にあつて聴覚と平衡覚をつかさどる器官。左右一対あり、哺乳類と一部の鳥類では外耳・中耳・内耳の三部から成る。また、外耳のうち外から見える耳殻や外耳道をさす場合がある。魚類は内耳のみ、両生類・爬虫類は内耳と中耳をもつ。	①頭部の左右にあり、聴覚および平衡感覚をつかさどる器官。哺乳類では耳介（耳殻）が張り出し、鳥類とともに外耳・中耳・内耳の3部分からなる。爬虫類・両生類では中耳・内耳があり、鼓膜が露出。魚類では内耳だけで、平衡器としての働きが大きい。
II	②聞くこと。聞えること。聴覚。また、音に対する感受性。	②音を聞いたり聞きわけたり情報を集めたりする力。聴力。	②聞く能力。聴力。また、聞くこと。聞こえること。
III	④耳殻のような形をした取手。	④耳に似た形のもの。特に器物の取手。	③耳のように器物の両側についている部分。取手。
	⑤針のめど。みみず。	⑥のれん・わらじ・針などのひもを通すための輪。乳。	⑤針の糸を通す穴。めど。
	⑨暖簾・草鞋などの紐を通すための小さい輪。乳。		

Ⅲ	⑥織物・紙類または食パンなどの縁、またその縁の厚くなったところ。	③織物・紙・食パンなどの端の方の部分。	④織物や紙・食パンなどのふち・へり。
	⑦書籍の部分の名。上製本で、本の開きをよくするため、中身の背を両側に押し広げた隆起部分。	⑤本の部分の名。本製本で、表紙の平と背の境目のやや隆起した部分。	⑥本製本の書籍で、背の両側のやや隆起した部分。
	⑧大判・小判のへり。転じて、その枚数。	⑧大判・小判のへり。転じて、その枚数。	⑧大判・小判のふち。転じて、その枚数。
	⑩近世の兜の吹き返しの俗称。	⑦江戸時代、兜の吹き返しの俗称。	⑦兜の吹き返しの異称。

上で再整理した「ミミ」の3系統の意味を表にまとめると次のようになる。なお、辞典名の右側の番号は各辞典における項目の通し番号を示す。

I 「身体部位」「感覚器官」としての意味：広辞苑①，広辞苑②，大辞林①，大辞泉①
II 「感覚器官」としての「働き」「機能」の意味：広辞苑③，大辞林②，大辞泉②
III 「モノの一部」としての意味 (A) 耳の「位置」との類似： i) 器物の一部（取っ手）：広辞苑④，大辞林④，大辞泉③ ii) 兜の一部（吹き返し）：広辞苑⑩，大辞林⑦，大辞泉⑦ iii) 本の一部（隆起部）：広辞苑⑦，大辞林⑤，大辞泉⑥ iv) 織物・紙・食パンなどの一部（ふち）：広辞苑⑥，大辞林③，大辞泉④ v) 大判・小判などの一部（ふち）：広辞苑⑧，大辞林⑧，大辞泉⑧ (B) 耳の「形状」との類似（通し穴）：広辞苑⑤，大辞林⑥，大辞泉⑤，広辞苑⑨

上記のように、国語辞典の定義を再整理した結果をもとに、「ミミ」に対して最終的に次のような7個の意味（基本義と転義）を認定する<sup>2)</sup>。

#### I 「身体部位」「感覚器官」としての意味

語義① 〈耳介〉：概念 {頭部の左右に外に向けて張り出した、聴覚と平衡感覚を司る、一對の感覚器官}

(3) 顔の大きさに比べて、ミミが大きめの人っていますよね。人よりちょっと大きい自分のミミを気にしている方もいらっしゃるようです。なかには悩みを抱えている方もいるみたいです。

<http://takablog.net/10889.html>

#### II 「感覚器官」としての能力の意味

語義② 〈聴く力〉：概念 {音に対する感受性。音を聞いたり、聞きわけたりする能力}

(4) よく音楽的にミミがいいというと、ポーンと出した音の音程を正確に言い当てられること。つまり、「絶対音感」がある人のことを、ミミがいい！と評する傾向があります。

<http://saito-akihiro.com/?p=24>

### Ⅲ 「モノの一部」としての意味

#### A) 耳の「位置」との類似

語義③ 〈取っ手〉：概念 {特に器物の両側についている部分，耳たぶ（耳殻）に似た形をした部分}

(5) 陶工たちの技術の追求は，うつわの白さや，染付けだけに留まりませんでした。花瓶のミミや蓋物のつまみ部分などにほどこされた美しい細工や，透かし彫り，卵の殻のように薄く透き通るような白磁は，「卵殻手（らんかくで）」「薄胎（はくたい）」とよばれました。

<http://tabinaga.jp/column/view.php?category=5&hid=20140226202556&offset=3>

語義④ 〈(兜の) 吹き返し〉：概念 {兜の左右にあつて，上方に反り返った，刀が当たらないように顔を守る部分}

(6) 頭の兜の鉢には，頭の形に沿った楕円形の阿古陀筋（あこだすじ）造りになっており，より本物に近い高度な技術を駆使致しました兜の緞には金小札に淡いクリーム系の白の組み紐でしっかりと編みこみ，兜のミミの部分の吹き返しには大きめな菊紋金具を配するなど，手の込んだ造りになっています。

<http://www.ronkorosu.club/shukoh/p93109.html>

語義⑤ 〈(本の) 隆起部〉：概念 {上製本の書籍で，本の開きをよくするため，中身の背を両側に押し広げた時の，平（表紙）と背の境目のやや隆起した部分}

(7) 本の背に丸味を加えた中身を，板またはバッキング機にはさんで締め付けると，背の左右の両端が両側に押し広げられてはみ出る。このはみ出た部分を中心から左右の端へ順にたたくと，その部分が角張り，これがミミである。つまり，中身の背を両側に押し広げた隆起部で，表紙を接合しやすくし，本の開きをよくして，小口が前へ押し出るのを防ぐのに役立つ。

<http://www.watanabeseihon.com/article/14110279.html>

語義⑥ 〈(平らなものの) ふち〉：概念 {食パン・紙類・織物・大判・小判・などの端の方の部分，またはそのへりの厚くなった部分}



(8) 単純ですがパンのミミは焼き目ですね。だから本来は外（外周）の部分は全てミミですね。スライスしてあるから周りがミミなだけです。当然スライス前ならミミに覆われていますよ。

[https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1277363432](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1277363432)

(9) 紙のミミとは、製紙工程で紙匹の両端を断裁し取り除く部分の紙のことをいいますが、使用目的によってミミを残す場合もあります（JIS P 0001 番号5108）。実際に「紙のミミを落とす」とか「紙にミミを付ける」や「ミミ付きの紙」などと使われますが、英語では、切り（刈り）取られた物の意味を持つ、trimmingsが「ミミ」の意で表現されます。

<http://dtp-bbs.com/road-to-the-paper/faq/faq-007.html>

(10) 布生地のミミとは、布生地の両端部の事です。染加工の時についた2列の針穴が空いています。ミミの部分だけ違う織組織にしたものをミミ組織と言います。

<http://kijiya.me/?p=2063>

(11) 「耳」は頭部の中心から端に位置することから、「パンのミミ」と言うように「縁」を意味する。大判や小判の縁も「ミミ」と言ったことから、金銭を不足なく取り揃えることを「ミミをそろえる」と言うようになった。札東の端を揃えることからとも言われるが、紙幣が一般に流通する以前から使われている言葉である<sup>3)</sup>。

<http://gogen-allguide.com/mi/mimiwosoroeru.html>

## B) 耳の「形状」との類似

語義⑦ 〈糸やひもを通す〉通し穴：概念 {針などの糸を通す穴。のれん・わらじなどのひもを通すための小さい輪}

(12) ですが、中心視力は焦点さえ合えば針のミミに糸を通すのもそんなに苦労はなく、縫物もちゃんと出来ておりました。

<http://www.jrps.org/fukuoka/local/sikihen-sireez/rensai07.html>

(13) そこそこ編めたら、ミミ（地方によっては乳）という、別紐を通す輪っかを作ります。左右に二つの、計四つ。場所は、足首の始まる前と、土踏まずの終わる辺りが目安になります。（わらじについて）<sup>4)</sup>

<https://togetter.com/li/542341>

### 3.2 「ミミ」の意味拡張の動機付け

上で「ミミ」に7個の複数の意味を区別した。ここでは「ミミ」の意味拡張とその要因となる認知的動機付けについて考察するが、最初に意味拡張の起点となるプロトタイプの意味（基本義）を仮定する。多義語の複数の意味のうち、プロトタイプの意味が備えた特徴と傾向性を第2節で示したが、それらを考慮すれば、「ミミ」の複数の意味の中でも文字通り「身体性・具体性」の高い語義①〈耳介〉を基本義として仮定するのが妥当であろう。

次に、基本義〈耳介〉からその他の転義へ意味拡張であるが、その認知的動機付けに関しては、耳の位置と形状との類似性に基づくもの（メタファー的拡張）、あるいは、耳の機能（音を聞くこと）との隣接性（近接性）に基づくもの（メトニミー的拡張）のどちらかに分けられる：

#### 3.2.1 メタファー的拡張

**基本義〈耳介〉⇒転義〈取っ手〉**：花瓶などの取っ手は、花瓶を人の顔に見立てれば、その位置が耳の位置と類似している。場合によっては、耳の形状と類似した取っ手もあり得るが、常にそうとは限らない。したがって、これは耳の位置との類似性に誘発されたメタファーによる意味拡張と判断した。

**基本義〈耳介〉⇒転義〈吹き返し〉**：兜の吹き返しは左右一対であり、また、兜を人の顔に見立てれば、その位置が耳の位置と類似している。したがって、これは類似性に誘発されたメタファーによる意味拡張といえる。

**基本義〈耳介〉⇒転義〈隆起部〉**：本の中身の背を両側に押し広げた時の、表紙と背の両側の境目の隆起した部分は、本の左右の両端の側面に位置している。人間の耳も顔の側面に位置している。したがって、側面に位置するという特性の類似性に誘発されたメタファーによる意味拡張といえる。

**基本義〈耳介〉⇒転義〈ふち〉**：パンや大判小判などの「耳」は、それらの周囲の側面に位置している。人間の耳も顔の側面に位置している。したがって、側面に位置するという特性の類似性<sup>5)</sup>に誘発されたメタファーによる意味拡張といえる。

**基本義〈耳介〉⇒転義〈通し穴〉**：糸やひもを通すための穴や輪は、通常、円形あるいは楕円形をしている。耳の形状も楕円形状をしている。加えて、人間の耳は内部に向かって空洞になっている、言い換えると、中が抜けており、穴や輪の「中が抜けている」という特性を共有している。したがって、これは形状の類似性に誘発されたメタファーによる意味拡張といえる。

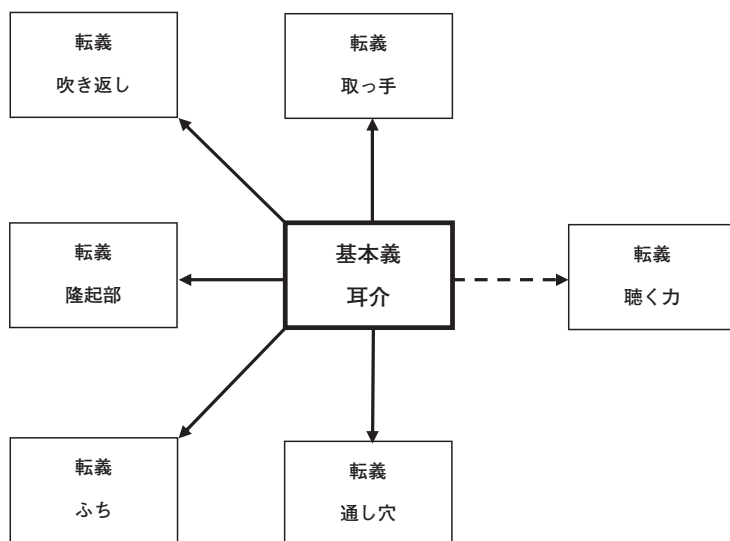
### 3.2.2 メトニミー的拡張

**基本義〈耳介〉⇒転義〈聴く力〉**：人間の「耳」の主要な働き・機能は音を聞くことである。音を聞いて認識できることは、聞く能力があるということである。このように耳と聞く力とは密接な関係がある。したがって、これは近接性に誘発されたメトニミーによる意味拡張といえる。

### 3.3 「ミミ」の意味のネットワーク

上で「ミミ」に対し7個の語義を区別し、基本義を仮定した。そして、そこから各転義への意味拡張を展開する際に、どのような認知的動機付けを経て新たな語義を獲得するのか、ということも認定した。その結果、「ミミ」は下のような放射状カテゴリー（意味のネットワーク）を構成すると仮定できる。なお、下の図で、実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに動機付けられた意味拡張を表す。

図2 「ミミ」の放射状カテゴリー



## 4. 英語“ear”の多義構造

### 4.1 “ear”の複数の意味

ここでは、“ear”の複数の意味（語義）の区別を行う。語義の区別に際して、指針とするのは英英辞典における意味の分類と定義である。本論では、*Webster's New World Dictionary*（以後、WNW、語義数5）、*Concise Oxford Dictionary of Current English*（COD、語義数4）、*MacMillan English Dictionary for Advanced Learners*（MED、語義数3）の英英辞典を参照する。語義数に

関しては大きな差はないが、意味領域・分野が共通している、あるいは近い定義（便宜上、日本語に訳して引用）をまとめて再整理すると次のような3系統に分かれる<sup>6)</sup>。

	WNW	COD	MED
I	① the part of the body specialized for the perception of sound; organ of hearing: the human ear consists of the external ear, the middle ear (tympanum) , and the inner ear (labyrinth) , which also senses one's state of equilibrium (音の知覚に特化された身体の一部。聴覚器官：人間の耳は、外耳、中耳(鼓膜)、および内耳(内耳迷路) からなり、平衡状態も感知する) ② the visible, external part of the ear (目に見える、外につき出た耳の一部)	① a) an organ for hearing and balance in man and vertebrates, esp. the external part of this (人および脊椎動物における聴覚および平衡感覚をつかさどる器官。特に、外に出た部分) b) an organ sensitive to sound in other animals (他の動物で音に敏感な器官)	① one of the organs on either side of your head that you hear with (頭の両側に2つある音を聴くための部分)
II	③ the sense of hearing (聴覚) ④ the ability to recognize slight differences in sound, esp. in the pitch, rhythm, etc. of musical tones (音のわずかな違いを認識する能力。特に、楽器音のピッチ、リズムなど)	② the faculty of discriminating sounds (音を区別する能力) ④ listening, attention (聞くこと、注意すること)	② the ability to hear sounds (音を聞くための能力)
	⑤ anything shaped or placed like an ear, as the handle of a pitcher or a small box in the upper corner of a newspaper page (耳のような形、あるいは耳と同じような位置にあるもので、水差しの取っ手、新聞のページの上部の両端にある小さな四角い欄のようなもの)	③ n ear-shaped thing, esp. the handle of a jug (耳の形のもの、特に、水差しの取っ手)	③ the top part of plants, such as wheat, that produces grain (小麦などの植物の上方の穀粒を含んだ部分)

上で再整理した“ear”の3系統の意味を表にまとめると次のようになる。なお、辞典名の右側の番号は各辞典における項目の通し番号を示す。

I 「身体部位」「聴覚器官」としての意味：WNW①②, COD①, MED①
II 「聴覚器官」としての「働き」「機能」の意味：WNW③④, COD②④, MED②
III 「モノの一部」としての意味：WNW⑤, COD③, MED③

上記のように、英英辞典の記述を再整理した結果をもとに、“ear”に対して最終的に次のような3個の意味（基本義と転義）<sup>7)</sup>を認定する。

#### I 「身体部位」「聴覚器官」としての意味

語義① 〈耳介〉：概念 {頭の両側の外に出た、聴覚と平衡感覚を司る、音を知覚するための1対の器官}

(14) Your ears transmit sound waves to the brain, and having an ear on each side of the head makes it easier for us to determine where the sound is coming from. Sometimes referred to as localization, having two ears allows you to understand where someone is if he is talking to you in a social setting, where construction is, or who is honking his horn. (耳は音波を脳に伝達します, そして頭の両側に耳があることで音がどこから来ているのかを容易に判断できます。耳が2つあることで, 誰かが社会的な状況であなたに話してかけているのか, 工事が行われているのか, あるいは誰かがクラクションを鳴らしているのか, を理解できますが, それは時として音源定位と呼ばれることもあります)

<https://www.healthyhearing.com/report/51383-Why-do-we-have-two-ears>

## Ⅱ 「聴覚器官」としての「働き」「機能」の意味

語義② 〈聴く力〉: 概念 {音に注意を向ける能力。楽器のピッチ, リズムなどを聞き, 音のわずかな違いを認識し判断する能力}

(15) Having a good ear for music means being able to hear accurately and understand what you're hearing. This takes a wide variety of forms, encompassing every aspect of music—including melody, harmony, rhythm, timbre, audio quality, music production, effects, and more. (音楽に対して良い耳を持っているということは, 正確に聞けることそして聞いている内容を理解できるということです。これはメロディー, ハーモニー, リズム, 音色, 音質, 音楽制作, エフェクトなどを含みますが, 音楽のあらゆる側面を網羅するさまざまな形式を取っています)

<https://www.musical-u.com/learn/how-can-i-get-a-good-ear-for-music/>

## Ⅲ 「モノの一部」としての意味

語義③ 〈耳に似たもの〉: 概念 {耳のような形のもの, あるいは, 耳と同じような位置にあるもの, 例えば, 瓶や水差しの取っ手, 新聞ページ上部両端にある小さな囲み欄}

(16) This vase with two ears has lovely hand-painted motifs. (2つ取っ手のついたこの花瓶は手描きのモチーフが素敵です)

<https://www.artdecowebstore.com/79/3/438/iris-ear-vase/>

(17) The space in the upper right or left corner of the front page of a newspaper is called the ear. The ear is used for a slogan, the date, the weather, or for drawing attention to a special feature. (新聞表紙の右上または左上の隅のスペースを「耳」と呼びます。「耳」は宣伝文句, 日付, 天気, または特集に読者の関心を引くために使用されます)

<https://www.brighthub.com/multimedia/publishing/articles/81427.aspx>

#### 4.2 “ear” の意味拡張の動機付け

上で“ear”に3個の複数の意味を区別した。ここでは「ミミ」の意味拡張とその要因となる認知的動機付けについて考察するが、最初に意味拡張の起点となるプロトタイプの意味（基本義）を仮定する。多義語の複数の意味のうち、プロトタイプの意味が備えた特徴と傾向性を第2節で示したが、それらを考慮すれば、“ear”の複数の意味の中でも文字通り「身体性・具体性」の高い語義①〈耳介〉を基本義として仮定するのが妥当であろう。

次に、基本義〈耳介〉からその他の転義への意味拡張であるが、その認知的動機付けに関しては、耳の形状または位置との類似性に基づくメタファー的拡張、あるいは、耳の機能（音を聞くこと）との隣接性（近接性）に基づくメトニミー的拡張のどちらかに分けられる：

##### 4.2.1 メトニミー的拡張

**基本義〈耳介〉⇒転義〈聴く力〉**：人間の「耳」の重要な機能の一つは、音を聞くことである。音を聞くという機能は、さらに、聞いてそれを精密に認識・判別する働きへもつながる。「耳」をもって、その働きについて指示しているので、この意味拡張はメトニミーによるものといえる。

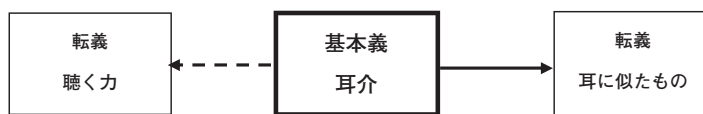
##### 4.2.2 メタファー的拡張

**基本義〈耳介〉⇒転義〈耳に似たもの〉**：「耳」は通常人間の頭部の両側にペアで付いているものである。位置の類似性に動機付けられた意味拡張なので、これはメタファーといえる。

#### 4.3 “ear” の意味のネットワーク

上で英語の多義語“ear”に対し3個の語義を区別し、基本義を仮定した。そして、そこから各転義への意味拡張を展開する際に、どのような認知的動機付けを経て新たな語義を獲得するのか、ということも認定した。その結果、“ear”は下のような放射状カテゴリー（意味のネットワーク）を構成すると仮定できる。なお、下の図で、実線矢印はメタファーに、破線矢印はメトニミーに動機付けられた意味拡張を表す。

図3 “ear” の放射状カテゴリー



## 5. おわりに

本論は、日本語と英語の身体部位語彙「ミミ」と“ear”の多義性について認知意味論的観点から分析し、「ミミ」と“ear”の多義構造における類似点と相違点について対照言語学的観点から考察した。その結果明らかになったのは以下のような点である：

- ①「ミミ」と“ear”は多義語であり、放射状カテゴリーを構成する。
- ②「ミミ」と“ear”の基本義として、身体部位の意味〈耳介〉を仮定するのが妥当である。
- ③基本義から派生した転義の数に関しては“ear”よりも「ミミ」が豊富である。
- ④「ミミ」と“ear”の両者を通じ、意味拡張の主たる動機付けはメタファーかメトニミーである。

最後に、一般に身体部位としての「耳」の特徴は、基本的に次の4項目に基づいて捉えることができるだろう：

- ①形状：楕円形。
- ②位置：顔の側面（目の横）にある。
- ③構造：外耳は外部に出ている。
- ④機能：音を知覚する聴覚器官。

日英語両語を通じて、これらの4つの特徴のうち、特に「位置」「機能」に動機付けられて派生した、すなわち、メタファーかメトニミーに動機付けられて派生した語義がほとんどであることが興味深い点である。

## 後注

- 1) 認知意味論では、人間を、意味を読み取り、意味を発信する主体とみなし、「意味」については、人間の身体性（感覚・知覚・認知など）の総合的な営みを通じて概念化されたものと考えている。そして、概念化することはカテゴリー化することと同じであるという立場を取る。
- 2) 本論では、意味の記述に2つのレベルを設ける。一つは、「語義」で〈…〉で囲んで表す。もう一つは、「概念」で{|…|}で囲んで表す。「語義」と「概念」は、それぞれ語の意味の一側面を構成する。「語義」は、語の意味をなるべく簡潔に、ワンフレーズで収まるようにまとめた記述である。「概念」は、語の意味をなるべく、具体的に、詳細に、百科事典の意味をも交えて、まとめた多面的記述である。
- 3) この例文にある「耳をそろえる」という慣用表現は、もともと「大判・小判の縁をそろえる」、つまり「そろえるということは必要な枚数・金額を準備する」ことだから「全額を不足なく用意する」というメトニミー的な意味を派生したことになる。
- 4) 「のれんの耳（ミミ）」という表現については、検索できた例文が極めて少数であった。一方、「のれんの乳（チチ）」という表現で検索できた例文は多数だったので、むしろ「耳」より「乳」という言い方が一般的であると思われる。

- 5) 査読者から「耳の形状」との類似性の可能性も指摘されたが、ここではパンや大判小判などの「耳」の位置に焦点を置いている。すなわち、人間の「耳」は顔の端にあり、同様に、パンや大判小判などの「耳」も平面的なもの端に位置しているという共通点に着目した。
- 6) MEDの第3項目の定義“the part at the top of a plant such as wheat that contains the grain”は、同音異義語としての“ear”のものなので分析の対象外とする。
- 7) 査読者から日本語「ミミ」の語義数（基本義と転義の数）に比して英語“ear”の語義数が少ないことが指摘された。多義語の意味を区別する際、その目安と指針を得るために辞典の定義と記述に頼らざるを得ないという側面がある。本論で日英語の語義数における差異が生じたのは、参照した日本語辞典の記述が詳細であり、それに対して、英英辞典の記述の方が比較的簡潔であったということが反映していると考えられる。

## 参考文献

- Dirven, René and Marjolijn Verspoor (1998) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Labov, William (1973) The Boundaries of Words and Their Meanings. In: Charles-James N. Bailey and Roger W. Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*, 340-373. Washington: Georgetown University Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京：研究社.
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 73-134. 東京：大修館書店.
- Rosch, Eleanor (1975) Cognitive Representations of Semantic Categories. *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一 (1997) 「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化発想とレトリック』(日英語比較選書①) 94-177. 東京：研究社.
- 瀬戸賢一 (編) (2007a) 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- 瀬戸賢一 (2007b) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』31-61. 東京：ひつじ書房.
- 瀬戸賢一 (2019) 「メタファー・メトニミー・シネクドキ」辻幸夫 (編) 『認知言語学大辞典』303-314. 東京：朝倉書店.
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望 (2017) 『[認知言語学演習②] 解いて学ぶ認知意味論』東京：大修館書店.
- Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋英光 (2010) 『言葉のしくみ—認知言語学のはなし』札幌：北海道大学出版会.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社.
- 辻幸夫 (2013) 『新編 認知言語学キーワード辞典』東京：研究社.
- Wittgenstein, Ludwig (1978) *Philosophical Investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.



**参照英英辞典**

*Concise Oxford Dictionary of Current English* (12th edition)

*MacMillan English Dictionary for Advanced Learners* (new edition)

*Webster's New World Dictionary* (5th edition)

**参照英和辞典**

『ライトハウス英和辞典』（講談社，初版）

**参照国語辞典**

『広辞苑』（岩波書店，第五版）

『大辞林』（三省堂，第三版）

『大辞泉』（小学館，第二版）